

第 9 話:メイコ登場

(1)

「ちくしょう！」

唱太は、涙にくもる目で、コントロール・ギターをかき鳴らす。緑色のオーラが立ち上り、防御結界を展開したのと、ハクが歌いだしたのとは、紙一重の差だった。ぎりぎりでかわしたものの、歌の魔力を少し受けたようだ。ミクは、はらはらとして事態を見守る。思考トレースはオフの状態だ。あいかわらず、マニュアルで操作するしかないが、肝心の唱太は自由を奪われて、ギターが弾けない。よしんば、自由に弾けるにしろ、相手が相手だ。殺すわけにもいかない。

「1万人目のお客さん？私の歌は嫌いなのか？」

「ハクヨさん！目を覚まして。
ノイズに意思を乗っ取られないで！」

必死に、ミクはハクを説得するが、彼女は機嫌を損ねた声で応える。

「あなたの声、気に入らないわね。すごく！」

「ハクヨさん！」

「お袋っ！」

ハクの次の歌声で、防御結界は残らず消し飛んでしまう。唱太は、目を閉じて覚悟をきめると、ミクに指示を出す。倒すしかない、苦渋の声で叫ぶ。

「ミク！第七位、能天使奏楽(カシエル・ノート)の
フィルムルヴェドだ！」

「いえ、それよりも。
第五位、主天使奏楽(ドミニオン・ノート)のほうが…。」

みくは、唱太に諫言し、説得させた上で、第五位で攻撃することに決めた。

2)

唱太は、ミクのコントローラー・エレキを構えて、ごく慣れた調子で伴奏をはじめると、ミクのヘッドセットのLEDが点滅して、入力コードが、オールグリーンになる。

「デバイスによる入力を確認。サンプリングを行います。」

1秒にも満たないうちに、ミクは、次の処理に移る。

「サンプリング終了。

補正、および、トランスポーズ完了しました。

CNR(カテドラルノートレベル)、フェイズ4に移行。

ノイズを、結界に捕捉します。」

ハクの真上の天空から、透き通った翡翠色のヤコブの階段が、スポットライトのように、彼女に降り注ぎ、その邪気を抑える。

「この光！すごく、気に入らない！」

結界から逃れようと、暴れだしたハクの邪気は異常に強く、結界を張るミクにも影響を与えだした。

「くうっ！結界が持たない…。」

ミクの懸念どおり、結界に徐々にではあるが、微細な罅(ひび)が走りかけている。

「気に入らない！気に入らない！気に入らない！」

ハクが、暴れるたびに、結界に亀裂が走っていく。破られるのも時間の問題だろう。

「主天使奏楽(ドミノン・ノート)システム、作動します。」

必殺技の準備が完了したことを示す、ヘッドセットのLSDが、オールグリーンの状態から、オールイエローにかわる。

「 フェイズ2に移行。第六位から、第四位までの神曲が、使用可能。
エーテル残量チェック。カウント始めます。」

三十秒のカウントダウンが始まり、
左の二の腕に、01 の紅いタトゥーが、浮かび上がった。

唱太とミクを護っていた緑色のオーラが、スポットライトのように、
収束して、ミクは息を吸い込むように、オーラを吸収し、目を閉じて、
精神を集中させる、どの歌がいいのだろう…。迷ったあげく神曲を宣言する。

「 第5階位。主天使奏楽(ドミニオン・ノート)。
サキエル・ノート・プロラクチヌス。」

LED が、オールレッドになったそのとき、究極の無原罪の素体から繰り出される、
ハクの魔曲を越えるカタルシスの力を有する、超音速のエーテル波の歌声は、完全
に
ノイズ化した、ハクの身体を包み込み、人の母性を司る遺伝子の FosB 遺伝子に作用
して、彼女の母性本能を高め、彼女とノイズを切り離そうと、効果を発揮する。

干渉を受け、珀世と分離するかに見えたハクのノイズは、抵抗を続けるまま、
簡単に消滅するかにみえたが、如何せん、三十秒では短すぎた。

ハクは踏ん張って、心の声を、太陽も突き抜けるほど、叫ぶ。

「 だから、その歌が
気に入らないのよおおおおおおおっ！ 」

却って、力が増したように、彼女はミクのエーテル波以上の歌声を吐き出すと同時
に、
ミクの神曲の効果も切れ、全エネルギーを、神曲に使い果たしたミクは、静かに倒れ
る。

「 しまっ…。」

唱太とミクは、逆にノイズの決壊に取り込まれてしまい、

ハクの歌は、辺りの空気を、邪気の結界内に振動させると、まるで、電子レンジの中で暖められているような状態になる。第二十四位の魔曲。焰魔奏楽(ノート・イフリート)という術だ。結界内の全てのものが、火種も無いのに自然発火していき、ハクの瞳と同じ紅蓮の焦熱地獄を、局所的とはいえ、作り出す。ハクは、うずくまるミクと唱太に勝ち誇ったような顔を見せて、どこかへと飛び去っていかうとした。地に伏せる、ミクと唱太は、悔しさと情けなさで、息苦しさも手伝って、灼熱の大地に気絶する。

その静まり返った戦場の中で、ハクは別の殺気を認め、咄嗟に叫びかけた。

「誰？」

2)

「やれやれ、ノイズの気配がするから来てみれば……。」

巫女の衣装に身を包んだ少女が、あきれたように言葉をつむぎだした。反射的に、ハクは、先ほどの攻撃を仕掛けたが……。簡単に、彼女をすり抜けてしまう。

「バカの一つ覚えの、第二十四位ね？ なってないんじゃない？」

突如、巫女の少女を守るように現れた赤い女性の影の声に、ハクは慌てて、問いかける。

「きさまら！ いったい、誰なんだ？」

「私？ 私は、メイコ。APA_10003。
Mind Effective Interface of Knowledgeable Omniscience ,
MEIKO よ？」

「メイコ？」

「そう、後ろの子は私のマスターの……」

「空音 羽嫩(そらね はのん)よ♪」

「よくも、私の妹を痛めつけてくれたわね？」

きつ! とメイコはハクを見つめ、彼女と対峙するが、当面の敵のハクのほうは興味をなくしたかのように、戦場を去ろうとしている。

「待ちなさい! 逃げるの!」

「私が興味があるのは、あの緑の髪の子だけよ……」

そういい残すと、ハクはその場を立ち去ろうと、飛び立った。

「待ちなさい!」

歌を発動させるには、時間が不十分だ。すでに、ハクは天高く去っているし、メイコは、エーテルの残量をチェックするが、飛行に関する神曲は、残念ながら、残量不足だった。しかたなしに、メイコと羽嫩(はのん)は、空に逃げる彼女を、見逃すこととしたが、次は逃さない。

「この子達の処置が先ね?」

羽嫩(はのん)とメイコは、ミクと唱太をかついで、自分達の住まいへと歩を進めた。

《 つづく 》